月刊 FALCOM MAGAZINE

Vol.101



ヨシュアの帰還、
そして“父”との再会

英雄伝説
空の軌跡SC
～絆の在り処～

『軌跡』シリーズ15周年！
すべてはここから始まった！

英雄伝説
空の軌跡 1

100号記念
キャンペーンが開始！
なんの100号……!?

も～っと集まれ！
ファルコム学園

今月もメインストーリーが続々更新！

『英雄伝説 暁の軌跡』

ファルコムニュース

スキル攻撃の詳細や
新キャラクターの
情報が到着！

イースIX
-Monstrum NOX-



FALCOM MAGAZINE

CONTENTS



序文

自分ではない何者かになる。
そんな夢を見たことがあるだろうか？

その夢の中で私は考える。
これは自分なのか、自分ではないのか。

夢が現実なのか、現実が夢なのか？
私が辿り着いた答えはひどく単純だ。

『どちらでもいいではないか』

どちらが真実なのか——ではない。
どちらも真実なのだ。

『バルドゥークの檻』本文より～

スキル攻撃の詳細や
新キャラクターの情報が到着！

『イースIX -Monstrum NOX-』

『イース』シリーズ最新作『イースIX -Monstrum NOX-』。今月はバトルシステムから、スキル攻撃の詳細が到着！　また、新たな登場人物たちの情報も続々と大公開！　そして、今まで PS4 で『イース』シリーズをプレイしていた人たちにはお得な情報も……!?

2019年9月26日発売！

タイトル：イースIX -Monstrum NOX-　**ジャンル**：アクション RPG
対応機種：PlayStation®4　**発売日**：2019 年 9 月 26 日予定
プレイ人数：1 人　**CERO レーティング**：審査予定

※画像は開発中のものです。



集え、怪人（モンストルム）たちよ！
この忌まわしき夜の宴に!!

アプリリス

CV：道井悠

監獄都市バルドゥークでアドルが出会った、強い意志を宿した瞳と義手義足が印象的なフード姿の女性。
年は若いが、冷徹とも取れる態度、他者を圧倒するような威厳を持ち合わせている。
度々怪人たちの前に姿を現し、助言めいた言葉を残すなど彼女の存在と行動の多くが謎に包まれている。
その身体は常に傷つき、疲弊しているようにも見えるが……。





パークス

CV：堀内賢雄

バルドゥーク監獄に投獄されていた、飄々とした壮年の男性。
アドルに出会ったことがきっかけで監獄にまつわる、ある重要な情報の提供者となる。
詐欺および経歴詐称の罪で捕まったようだが彼の口から語られる言葉はどこまでが真実なのか、その真相を知る者は誰もいない。



看守すら立入禁止の区域がある……
そんなウワサを聞いたことないかい？




カーラ



君にとっても悪い話ではないだろう？
――アドル・クリスティン

監獄都市バルドゥークで最大規模を誇るペンドルトン商会の女性商人。
優秀な交易商としてその将来を渇望されており、父リッシュから本店の実務を任されている。
商人としてメキメキと頭角を現す一方、引っ込み事案な妹との間に微妙な距離間が生まれてしまったらしい。…。





キリシャ



ご、ごめんなさい、お姉ちゃん……

豪商として知られるペンドルトン家の次女。
気弱で人見知りなところがあり、商人として目覚ましい活躍をみせる評判の姉にいつしかコンプレックスを抱くようになってしまった。
姉に倣って商会での仕事を始めたが、自分の力で稼いだ売上を何者かに盗まれてしまう。





シャンテ



ドギちゃん、上腕二頭筋がとっても…ス・テ・キ！

酒場《ダンデリオン》の店長を務めるノリの良いオネエ。
面倒見がよく、過去の人生経験を活かして的確なアドバイスをすることから男女問わず、様々な客からの相談を受けている。
バルドゥークでの交友関係も幅広く、住人の情報やロムン帝国側の事情にもある程度精通している。







ユファ



よォ～し、今日も一日頑張らなきゃ!!

ダンデリオンでウェイトレスとして働く元気いっぱいの娘。
明朗快活・頑張り屋で客からの評判も上々だが、年の離れた弟妹たちとの暮らしを支えるなど多くの苦労を一人で背負っている。
幼馴染の男性がバルドゥークの闘技場に勤めているらしく、時折彼女から耳寄りな情報を入手することも。





リッシュ

資本力で競争相手を叩き潰す。
それがペンドルトン家の流儀だ

バルドゥークで大きな影響を持つペンドルトン家の当主。
交易で辣腕を振るい、周辺地域の鉱山の採掘権を独占することで莫大な資本力を有している。
商売と利益のためには手段を選ばず、常に高圧的な態度をとっていることから彼の存在を快く思わない住人も数多くいるという。





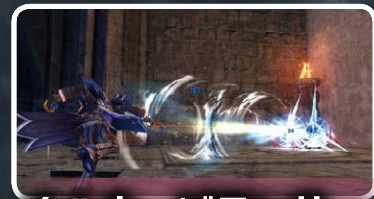
各キャラクターが持つ《スキル攻撃》の詳細が到着!!

『イース』シリーズといえばアクション！ ということで、今回は各キャラクター固有の技《スキル攻撃》の詳細が到着！ スキル攻撃の発動に消費される SP（スキルポイント）は通常攻撃ヒット時に回復していくほか、攻撃していない時にも高速で自動回復するため SP の減少を気にすることなく、派手なスキル攻撃を次々と繰り出すことようになっているぞ！ ちなみにスキル攻撃は R1 ボタン＋○×△□のいずれかを押すことで、それぞれのボタンに対応したスキルが発動する仕組みで、○×△□には、メニュー画面でそれぞれスキル攻撃を自由にセットすることが可能となっているのだ。



ワイルドスクラッチ
●白猫専用スキル

敵との距離を一瞬で詰め、豪快な2連撃のひっかき攻撃を繰り出すスキル攻撃。技の出が早く、通常攻撃から瞬時につなげることができるため体力の多い敵との戦闘ではコンビネーションに加えることでダメージアップを狙うことができる。



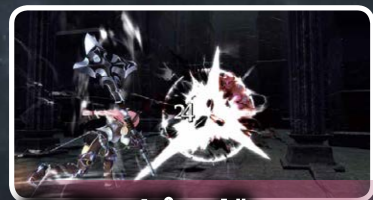
カルネージランサー
●鷹専用スキル

敵の目の前に突っ込んでいき、レーザーの如き突きをぶっ放す鷹のスキル攻撃。単発ではあるものの、射程がかなり長いため強敵との闘いではこのスキル攻撃を組み合わせることで距離を取った戦闘も可能。



幻想乱舞
●人形専用スキル

伸縮自在なスウィープソードの特性を活かした連続突きから広範囲の回転斬り、前方への爆破といった３段階の攻撃を流れるようにして繰り出す人形専用のスキル攻撃。ヒット数が多く広範囲をカバーしているため、ボス戦だけでなく集団戦にも向いている。



スタンピード
●猛牛専用スキル

力任せに突進し、衝撃波をまといながら前方の敵に打撃ダメージを与えるスキル攻撃。移動距離は短いものの威力が高く、小型の敵であればヒット時に吹き飛ばしてダウン状態にさせることも可能。



ダークインフェルノ
●背教者専用スキル

暗黒の球体を前方に発生させ、周囲の敵を引き寄せながら連続ダメージを与えるスキル攻撃。背教者は球体発生中も移動することができるため、球体に敵が引き寄せられている間に安全地帯まで退避したり、身動きの取れない敵に更に追加ダメージを与えることも可能。

PS4 版『イース』シリーズ所有者にはゲーム開始時に特殊アクセサリをプレゼント！

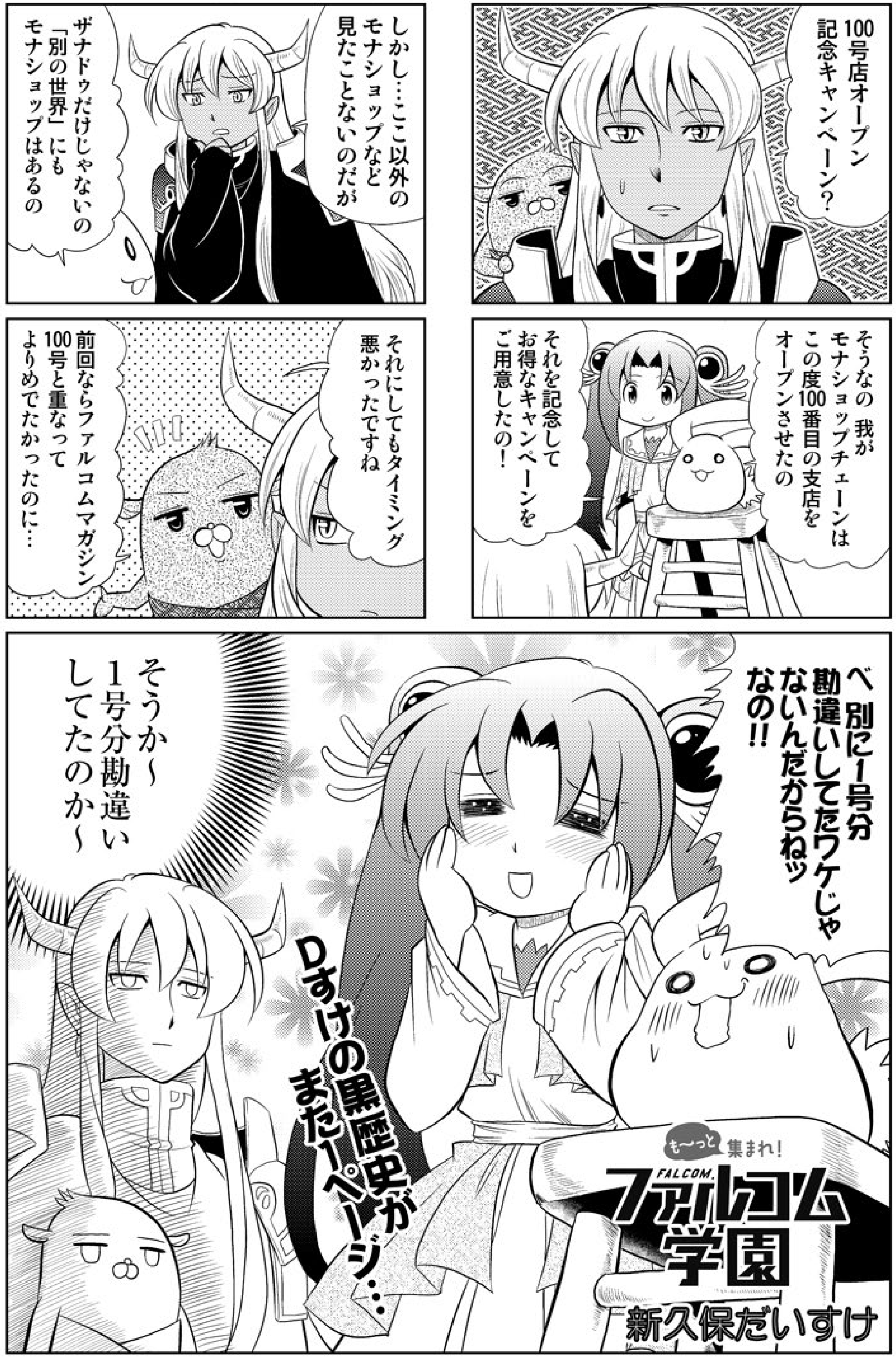
PS4 版『イース』シリーズのセーブデータを所有している場合、タイトルに応じてゲーム開始時に特殊なアクセサリを入手することができます。

- 『イースⅧ』の場合：【古き封じの指環】（ステータスＵＰ＋「必殺率」上昇効果）
- 『イース セルセタの樹海：改』の場合【セルセタの花飾り】（ステータスＵＰ＋「呪い」耐性付与）

※データ連動特典専用のアクセサリとなっているため、ゲーム内で入手することはできません。
※入手した連動特典アクセサリは周回プレイで引き継ぐ事も可能です。※パッケージ版、DL 版のどちらも対象となります。

《対象タイトル》『イースⅧ -Lacrimosa of DANA-』
『イースⅧ -Lacrimosa of DANA- クリスマス Gift パッケージ』
『イースⅧ -Lacrimosa of DANA- スーパープライス』／『イース セルセタの樹海：改』

★誰がなんと言おうと100号記念!!★







無資格者達



アイツの入れ知恵



彼女の色々なヒミツ



100%への道



合わせ技



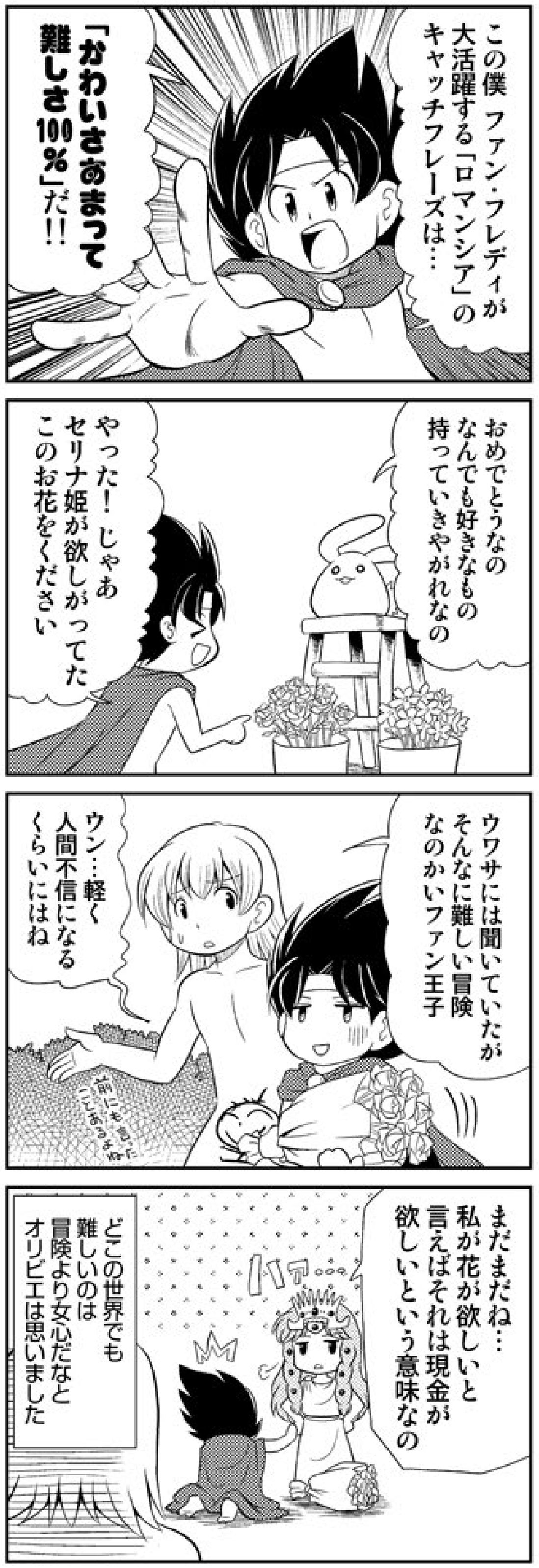
2人のホットライン



百冊目の冒険記



私が本当に欲しいもの



百の記憶



失敗料理



誰かの塔

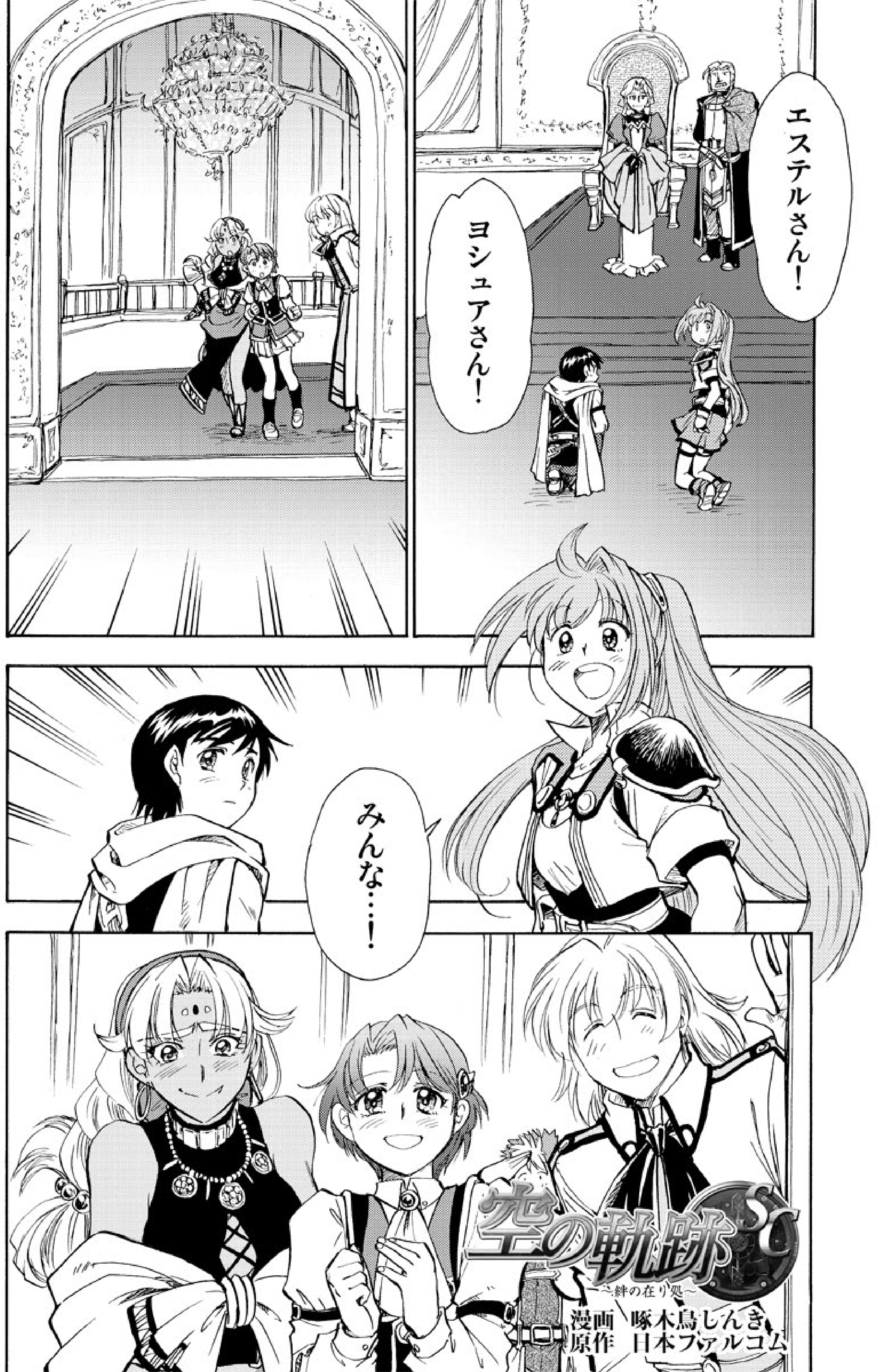


ムカデ




FB ファルコムBOOKS
空の軌跡外伝
レーヴェ物語
作画:楽時たらひ 脚本:田沢大典
『空の軌跡』が始まる――
もうひとつの
原作:日本ファルコム
(『英雄伝説 空の軌跡』)
価格:893円(税込)
ISBN:978-489610-224-6
『英雄伝説 空の軌跡』の人気キャラクター・《剣帝》レオンハルトの過去を描くアウターストーリーのコミカライズ。彼はいかにして《身喰らう蛇》に与みし、数奇な運命を辿ったのか。レオンハルトの目線から見たもうひとつの『空の軌跡』の物語が始まる！ ©Nihon Falcom Corp. All right reserved.
全国書店にて大好評発売中!!
発行:フィールドワイ
発売:メディアパル
フィールドワイのHPはこちら www.field-y.co.jp


異世界《ザナドゥ》に勇者よ再び！
も～っと集まれ！
ファルコム学園
① 著者:新久保だいすけ
定価:本体900円＋税
学園生活を満喫していたが、全員が元の世界に戻っていった英雄・戦士達。しかし、再び彼らは伝説の桃源郷《ザナドゥ》へと帰ってきた！ 果たしてその理由とは⁉
奇才・新久保だいすけが贈る、お待ちかねのシーズンⅡ、リスタート！
ISBN:978-4-8021-3138-4
©Nihon Falcom Corp. All rights reserved.
©DAISUKE ARAKUBO
©2019 FIELD-Y
FB ファルコムBOOKS
発行:フィールドワイ
発売:メディアパル
フィールドワイ公式HPはこちら www.field-y.co.jp
ファルコムブックス公式HPはこちら www.field-y.co.jp/falcombooks


エステルさん！
ヨシュアさん！
みんな…！
空の軌跡SC
～絆の在り処～
漫画 啄木鳥しんき
原作 日本ファルコム


よかった…！
まったく もう！ あんたって 娘は！
結社に 捕まったと 思ったら どうしてさらっと 王都なんかに 来てるのよぉ!?
で…でも よく ご無事で…
それに…
おかえり
ヨシュア！


うん
ああ♡
愛しのヨシュアくん♡
ただい…
この日が来るのを待っていたよ♡
キャー♡
しかもしばらく見ないうちにしっかりイメージチェンジを決めこんだりして
でもそのクールないでたちもまたステキさ！
オリビエさんは相変わらずですね…
あー
そうとも！
ボクはいつでも愛と平和を叫ぶ漂泊の吟遊詩人なのさ！
あの…
オリビエさん
ずるずるずる
あなたは…
失礼します陛下
父さん!?
カシウスおまえまで…
レイストン要塞で警戒態勢の総指揮を執っていたのではないのか？
ええもちろん
こちらに参ったのもその件で…
陛下
王国軍第一種警戒態勢の発令に際し各方面への指示が完了したことをここにご報告致します
そんなことを伝えにわざわざ…
ご苦労様でしたカシウス殿
では今日の任務はこれで終わりにして構いませんよ


…は
エステル
それから ヨシュア…
ふたりとも 結社に関する 貴重な情報を よく持ち帰って くれた
おかげで 軍も幾ばくかの 準備対策が とれそうだ
軍作戦本部長として 礼を言う
…さてと
陛下の お許しも 出たことだし
ここからは
父親として
えー

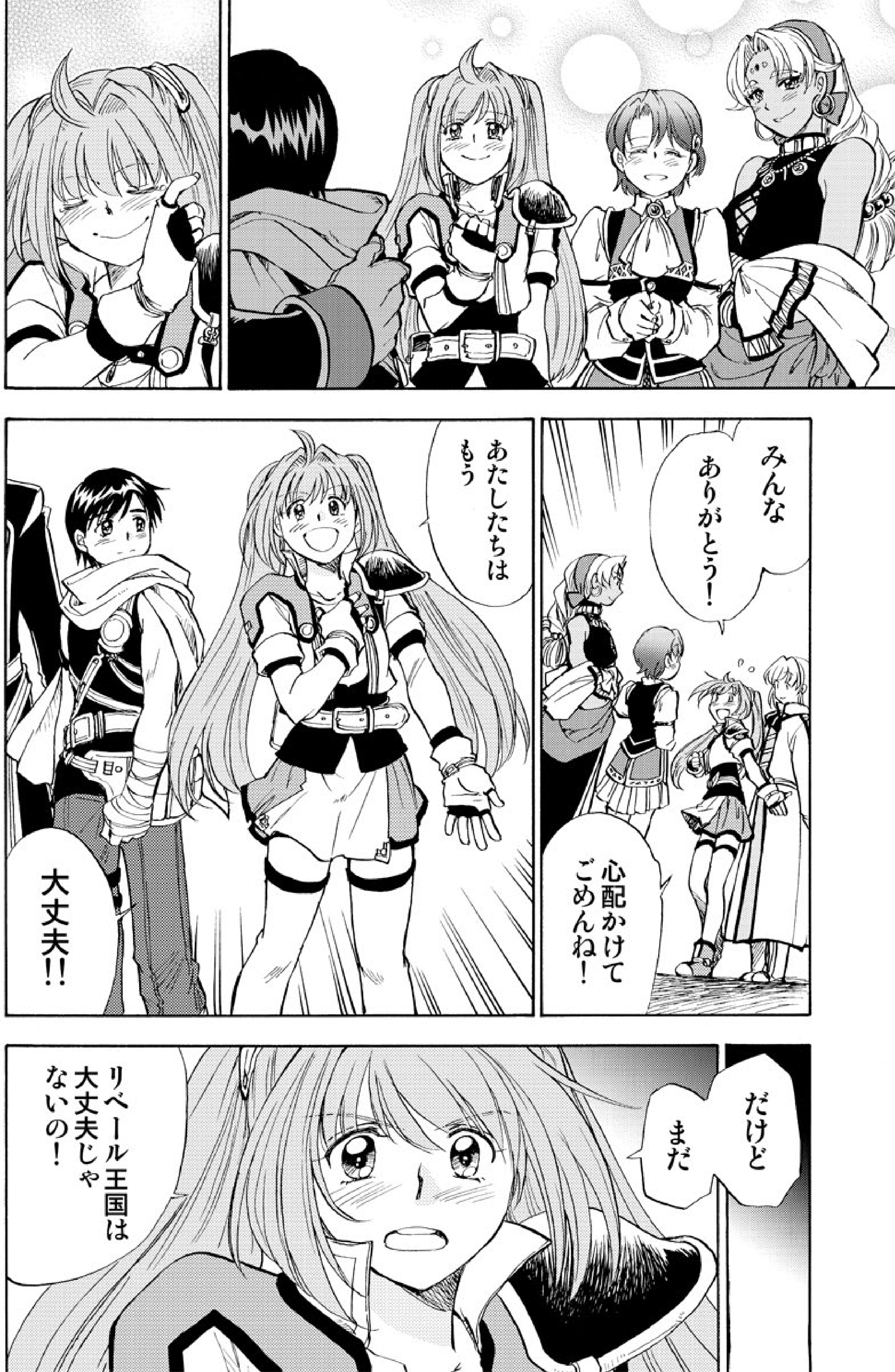

義務を 果たさせて もらうぞ
え…
バチーン!!
ちょ…
ちょっと 父さん!!
いいんだ エステル


家出息子には当然のお仕置きだから
そういうことだ
自分がどれだけ皆に心配をかけていたか実感できたか
うん…
みんな…僕なんかのために…
…なんて思ったら駄目なんだよね
いいかヨシュア人は様々なものに影響を受けながら生きていく存在だ
逆に生きていくだけで様々なものに影響を与えていく


それこそが「縁」であり
「縁」は深まれば
「絆」となる
そして一度結ばれた「絆」は
決して途切れることがないものなんだ
今回のことで
おまえも
その強さ
思い知っただろう？


うん
正直…侮っていた
確かに僕は
何も見えてなかったみたいだ
それが見えたのなら
家出したかいもあっただろう——…


この…馬鹿息子め!
本当に
よく帰ってきたな
…父さん…


みんな ありがとう！
心配かけて ごめんね！
あたしたちは もう
大丈夫!!
だけど まだ
リベール王国は 大丈夫じゃ ないの！


結社が 推し進める 「福音計画」は すでに 第3段階に 入っている
おそらくそれは このリベールに 大きな災いを もたらすものだ
そんなこと この国で
絶対に させるわけには いかないわ！
だから みんな
力を 貸して！
あたしたちの リベール王国を 守り抜くために！
次回に続く

FB ファルコムBOOKS

英雄伝説 零の軌跡
四つの運命

著者：田沢大典　イラスト：松竜



特務支援課は
ここから始まった!!

日本ファルコムの大ヒットＲＰＧ『英雄伝説 零の軌跡』から、ロイドたち特務支援課の過去エピソードを描いたオフィシャルノベライズ。ゲーム本編では語られなかった名シーンの裏側やキャラクターそれぞれの心情が今、明らかになる！

原作：日本ファルコム
（『英雄伝説 空の軌跡』）

価格：1,155円(税込)
ISBN:978-489610-215-4

全国書店にて大好評発売中!!

発行：フィールドワイ
発売：メディアパル

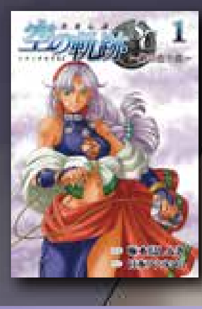
フィールドワイのHPはこちら ➡ www.field-y.co.jp

英雄伝説
空の軌跡SC 3
ソラノキセキSC
～絆の在り処～

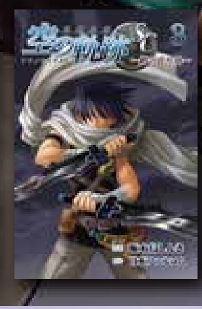


《剣帝》レオンハルトとともに現れた、古竜レグナートの暴走を抑えるために奮闘するエステルたち遊撃士一行。その頃、復讐者となったヨシュアはカプア一家の助力を受け、静かに結社《身喰らう蛇》へと迫りつつあった……。名作RPGのコミカライズ、迫真の第３巻！

昏き瞳の暗殺者
《漆黒の牙》復活







著者：啄木鳥しんき
原作：日本ファルコム

定価：本体800円+税
ISBN:978-4-8021-3124-7

発行：フィールドワイ
発売：メディアパル

フィールドワイ公式HPはこちら ➡ www.field-y.co.jp
ファルコムブックス公式HPはこちら ➡ www.field-y.co.jp/falcombooks

▶ファルコムニュース◀

ファルコムファンに贈る最新ニュースをピックアップ！

スマートフォン向けシミュレーションRPG 『WarLocksZ(ウォーロックスZ)』×『英雄伝説 閃の軌跡Ⅱ』 2019年6月28日(金)より期間限定コラボ開催！

ストーリーRPG『英雄伝説 閃の軌跡Ⅱ』とスマートフォン向け美少女×ロボットシミュレーションRPG『WarLocksZ(ウォーロックスZ)』のコラボレーションが2019年6月28日(金)より、期間限定で開催決定!!

コラボ期間中、『英雄伝説 閃の軌跡Ⅱ』のメインキャラクター『リィン』や『アリサ』達がウォーロックスの世界に迷い込み、新たな物語が展開します。

ランクコラボパイロットが貰えるイベントや、コラボ機体《灰の騎神・ヴァリマール》が入手できる期間限定ガチャなど、ゲーム内で『英雄伝説 閃の軌跡Ⅱ』のコンテンツをお楽しみ頂けます。



《WarLocksZ》公式サイト：http://warlocksz.edia-game.jp/

■コラボ詳細

①Sランクコラボパイロット『ユーシス』が貰えるイベントクエスト！
【開催期間】
2019年6月28日(金)16:00～2019年7月12日(金)14:59まで
リィン達とパズ諸王国連合の物語！ イベントクエストをクリアして、ユーシス交換券を集めよう！

②閃の軌跡Ⅱコラボガチャ第1弾
【開催期間】
2019年6月28日(金)16:00～2019年7月12日(金)14:59まで
機体『ヴァリマール』、武器『騎神太刀』、パイロット3名がガチャに登場！

③Sランクコラボパイロット『トワ』が貰えるイベントクエスト！
【開催期間】
2019年7月12日(金)16:00～2019年7月26日(金)14:59まで
クロウ達とヘーニル合衆国の物語！イベントクエストをクリアして、トワ交換券を集めよう！

④閃の軌跡Ⅱコラボガチャ第2弾
【開催期間】
2019年7月12日(金)16:00～2019年7月26日(金)14:59まで
機体『オルディーネ』、武器『ダブルセイバー』、パイロット3名がガチャに登場予定！
トールズ士官学院・特科クラスⅦ組メンバーの『リィン・シュバルツァー』、『アリサ・ラインフォルト』、『ユーシス・アルバレア』、トールズ士官学院・生徒会長の『トワ・ハーシェル』。
この他にも『英雄伝説 閃の軌跡Ⅱ』から人気キャラクターが多数登場します。





左：機体《灰の騎神・ヴァリマール》と武器『騎神太刀』
右：機体《蒼の騎神・オルディーネ》と武器『ダブルセイバー』

〈「WarLocksZ」iOS版〉
https://itunes.apple.com/app/id1408556211
〈「WarLocksZ」Google Play版〉
https://play.google.com/store/apps/details?id=com.gameone.warlockszJP.release
〈アプリ概要〉
タイトル：WarLocksZ(ウォーロックスZ)
対応端末：iOS／Android
ジャンル：美少女×ロボットシミュレーションRPG
料金：基本無料(アプリ内課金有)

■日本語版『WarLocksZ』について

『WarLocksZ』は、Gameone Group Ltd(本社:香港、CEO:Lam Kin Fai)が開発した香港・台湾で多くのユーザーから支持を得ている人気タイトル『魔法軍團WarLocksZ』の日本語版です。

3Dで描かれたオリジナルロボットたちが繰り広げる迫力満点のバトルが特徴的なシミュレーションRPG作品で、日本人声優を起用したキャラクターたちが織り成すストーリー性豊かで豊富なクエストに加え、スマートフォン向けに最適化された臨場感溢れるシミュレーションバトルをお楽しみ頂けます。

「閃の軌跡」「東京ザナドゥ」描き下ろしイラストの新商品が続々登場！ GraffArt SHOP 池袋本店・名古屋店・なんば店にて 6月29日(土)から販売開始！

6月29日(土)より、A3株式会社が運営をするGraffArt Shop(池袋本店・名古屋店・なんば店)において「閃の軌跡」「東京ザナドゥ」新作グッズが続々登場！

■ Falcom Base 公式 Twitter アカウント
https://twitter.com/Falcom_Base

■ GraffArt Shop with A3MARKET ONLINE
http://kyaragoods.shop-pro.jp/?mode=grp&gid=2012310











『閃の軌跡』ミリアムの相棒アガートラムのぬいぐるみが電撃屋にて予約受付中!!



2019年の6月に、15周年を迎える日本ファルコムの人気RPG『軌跡』シリーズ。
そのシリーズ最新作『閃の軌跡』に登場するミリアムのパートナー・アガートラムが、ぬいぐるみになってリリース！ 現在、電撃屋にて予約を受付中です。
ゲーム内同様、非常に愛らしく、且つぬいぐるみとしてのもちもち感を出した、ファンにはたまらないアイテムです。
背もたれにしてもよし、クッションにしてもよしの逸品。サイズは高さ約50cm。

このほかに、ぬいぐるみタイプのキーホルダーとして、ミリアムのパートナー・アガートラム（愛称ガーちゃん）、そしてアルティナが使役するクラウ=ソラスも用意。クラウ=ソラスのボディには黒兎（ブラックラビット）のマーク入り。
このミリアムパートナー・ガーちゃん、アルティナのパートナー・クーちゃんの、お得なぬいぐるみキーホルダーも2体セットで予約受付中。
さらに50cmもちもちぬいぐるみ ガーちゃんと、2体のぬいぐるみキーホルダーのお得なセットも。





【1】『閃の軌跡』シリーズ ぬいぐるみ もちもちガーちゃん
発売日：11 月下旬予定
販売価格：7,700 円（税込）
サイズ：全高約 50cm
素材：ポリエステル 95%+スパンデックス 5%／ナイレックス部分：ポリエステル 100%

【2】『閃の軌跡』シリーズ ぬいぐるみ キーホルダー ガーちゃん
発売日：11 月下旬予定
販売価格：1,980 円（税込）
サイズ：全高約 13cm
ボールチェーン付き
素材：ポリエステル 100%／ボールチェーン：鉄／ツリ紐：ナイロン

【3】『閃の軌跡』シリーズ ぬいぐるみ キーホルダー クーちゃん
発売日：11 月下旬予定
販売価格：1,980 円（税込）
サイズ：全高約 13cm
ボールチェーン付き
素材：ポリエステル 100%／ボールチェーン：鉄／ツリ紐：ナイロン



【4】『閃の軌跡』シリーズ ぬいぐるみ キーホルダー 2 種セット
発売日：11 月下旬予定
販売価格：3,740 円（税込）
各サイズ：全高約 13cm
ボールチェーン付き
素材：ポリエステル 100%／ボールチェーン：鉄／ツリ紐：ナイロン



【5】『閃の軌跡』シリーズ ぬいぐるみ 3 種セット（50cm ぬいぐるみ＋ぬいぐるみキーホルダー 2 種）
発売日：11 月下旬予定
販売価格：11,000 円（税込）
〈ぬいぐるみ もちもちガーちゃん〉
サイズ：全高約 50cm
素材：ポリエステル 95%+スパンデックス 5%／ナイレックス部分：ポリエステル 100%
〈ぬいぐるみキーホルダー 2 種〉
各サイズ：全高約 13cm
ボールチェーン付き
素材：ポリエステル 100%／ボールチェーン：鉄／ツリ紐：ナイロン

「イースⅨ」発売記念！ DLCフルセット入りお買い得版『イースⅧ -Lacrimosa of DANA- スーパープライス』絶賛発売中!!

シンプルかつ爽快なパーティバトル、バトルを盛り上げる熱いBGM、漂流者と共に拠点を発展させていく「漂流村」など、その完成度の高さと独自のシステムで新規ユーザーからも高い評価を受け「PlayStation® Awards2017ユーザーズチョイス賞」を受賞した「イースⅧ」。

2019年、その「イース」シリーズの完全新作となる「イースⅨ -Monstrum NOX-（モンストルム・ノクス）」の発売決定を記念して、「イースⅧ」をお買い得価格に設定したPlayStation® 4用タイトル『イースⅧ -Lacrimosa of DANA- スーパープライス』が新登場!

全22アイテム全部入り! 初回特典「イースⅧ コンプリートDLCパック」

PlayStation® 4版のラクシャ専用衣装「エタニアン・スカラー」や序盤～中盤の戦闘が有利になる装備アクセサリ、回復アイテム、強化用素材など、PlayStation® Storeで配信中のDLC全22アイテムが丸ごと手に入るプロダクトコードを初回生産特典としてパッケージに封入!



PS Storeで販売中のダウンロード版は早期購入特典として、2019年7月31日（水）までにご購入いただいた方のみ『イースⅧ コンプリートDLCパック』が付きます。













■商品概要：
タイトル：イースⅧ -Lacrimosa of DANA- スーパープライス
ジャンル：アクションRPG ／対応機種：PlayStation® 4
発売日：2019年6月20日（木）／価格：パッケージ版:4,800円（税抜）／ダウンロード版:4,500円（税込）
※商品内容は2017年5月25日に発売された『イースⅧ -Lacrimosa of DANA-』と同一のものです。
■『イースⅧ -Lacrimosa of DANA-』公式サイト https://www.falcom.co.jp/ys8_ps4/
■『イース』シリーズポータルサイト https://www.falcom.co.jp/ys_portal/

THE LEGEND OF HEROES

暁の軌跡

アカツキノキセキ

毎月魅力的な新キャラクターや衣装替えキャラクターが大注目の『英雄伝説 暁の軌跡』。６月もメインストーリーが続々と更新！　第７章第２弾前篇が実装され、後篇も近日実装予定！

『英雄伝説 暁の軌跡』公式ホームページ
http://akatuki.ujj.co.jp/

公式ツイッター
https://twitter.com/akatsuki_ujj

メインストーリー第７章第２弾「オルソンの道／前篇」が実装！



《戦争卿》の目を欺き、その情報を得る為に解散という決断を下した試験班。放たれた弾丸は全ての“真実”へ導く号砲となるのか。壊れゆく心と体は燃え盛る狂気の中で灰塵と化してしまうのか。
「私は、私の道を行く……。
　君たちにも邪魔はさせないよ」
見えざる敵との戦いは、まだ序章にすぎない――

※次回、第２弾「オルソンの道／後篇」は近日実装予定！

６月の新／衣装替えキャラクターをチェック！



花嫁・エリィ

６月といえばやっぱり外せないのが“ジューンブライド”！　普段はストレートにまとめていることが多いエリィが髪をまとめると、グッと大人っぽい雰囲気が漂ってくる。

アリス・トワ

「不思議の国のアリス」モチーフの最後を飾るのはトワ！　アリスの象徴ともいえる青のエプロンドレスと紺の大きなリボンを身に着けたトワはまさしく天使！

エリゼ・シュバルツァー

『閃の軌跡Ⅱ』からリィン・シュバルツァーの義妹・エリゼがプレイアブルキャラクターに！　ぜひともリィンや親友のアルフィンとパーティーを組んで使っていきたい！

7月の新規衣装替えキャラクターは？

※画像は開発中のものです。　※上記のイベントは状況により内容の変更を行う場合があります。

2019年は『軌跡』シリーズ15周年!

英雄伝説 空の軌跡1

歴代『軌跡』原作
ファルコムBOOKS
試し読み!



『軌跡』シリーズが2019年6月に15周年を迎えることを祝して、『軌跡』シリーズを原作としたファルコムBOOKSのお試し読みができる特別企画。第6回となる今回はついに15周年当月! ということで『空の軌跡』の『FC』本編ノベライズ第1巻、はせがわみやび先生の『英雄伝説 空の軌跡 1』をお届け!

製品情報

好評発売中

著　　　:はせがわみやび
イラスト:ワダアルコ
定　　価:1,200円(税別)

序章　父、旅立つ

カーテンの隙間を抜けて朝の日差しが部屋に差し込んでくる。

明るい光の筋は、ベッドで寝ているエステルの、まだふくらみの足りない胸元からのろのろと這いあがり、ようやく子どもっぽさの抜けてきた顔を照らした。

「……まぶし…………」

目を開ける。

「なにか聞こえる」

澄んだ音色がエステルの耳の奥で木霊（こだま）していた。ヨシュアの吹くハーモニカの音だと少し遅れて気づく。

『星の在り処（ありか）』、だ。

ヨシュアの好む曲。エステルも大好きな曲だった。

明るい旋律なのに何処か切ない。

「あは、もう起きてるみたいね。そうでなくちゃ！」



今日はエステルとヨシュアの二人にとって特別な日。
ヨシュアがエステルの家に来てから五年が経っていた。
二人とも十六歳になっていて、そして十六といえば《遊撃士（ブレイサー）》になれる歳だった。遊撃士協会の研修を無事に終わらせれば、二人とも遊撃士への第一歩を踏みだせる。
エステルは二階の廊下からテラスへとまわった。
「おはよ、ヨシュア。や〜、お姉さん、思わず聴き惚れちゃったわ」
「なにがお姉さんだか……。僕と同い年のくせにさ」
朝の陽射しのなか。テラスに出ていた黒髪の少年が言った。手にしたハーモニカが陽を受けて光っている。琥珀色の瞳がエステルを見つめてきた。
二人とも、どちらからともなく微笑み合う。
「おーい。エステル、ヨシュア」
階下から二人を呼ぶ父の声に、エステルとヨシュアは階段を降りていった。
三人でいつものように食卓を囲む。
「今日で研修も最後だね！　これで晴れて遊撃士かあ」
スクランブルエッグの残りをスプーンで口のなかに放り込みながらエステルが言った。
「そんなに甘くないと思うけど」
「ヨシュアってば、なんで暗い予想しかしないかな」

「君が能天気すぎるんだと思うよ」
二人のやりとりを眺めながら父が笑った。
それはいつもの朝の風景だった。
微笑みながらも父が言う。
「遊撃士は簡単な仕事じゃないぞ」
「わかってるもん。それでも、あたしは遊撃士になるから！」
父の胸元を飾る遊撃士の紋章を見つめながらエステルは言った。
遊撃士——。
魔獣退治や犯罪防止、荷物の護衛から落し物の捜索まで、様々な形で地域に貢献する仕事をこなす戦闘・調査・護衛のスペシャリストである。
だが、エステルにとってはそれだけではない。
遊撃士はこの国が無くなるのを防いでくれた人たちであり、忌まわしい戦争を終息させてくれた人たちのことだった。
エステルたちの住むリベール王国は、大陸の西部に位置し、豊かな自然と伝統に育まれた、大陸でも有数の《七耀石（セプチウム）》の産地だった。
七耀石——《導力》と呼ばれるエネルギーの源であるこの鉱石を産出することで、リベールは世界でも最高水準の《導力器（オーブメント）》技術を持つに至った。

だが、優れた技術は良いことばかりをもたらさない。
この導力器を巡って戦争が起こった。
リベール王国の導力器技術と七耀石に目をつけた北方のエレボニア帝国が、侵略戦争を仕掛けてきたのだ。
後に《百日戦役》と呼ばれることになる戦争である。
十年前――エステルが六歳のときだった。
リベール王国は、多大な犠牲を出しながらも帝国の侵略を辛うじて退けたのだが、このとき戦争を終わらせるための講和に大きな貢献をした組織があった。
それが大陸全土に支部をもつ遊撃士協会（ブレイサーギルド）である。
協会の活躍もあって、激しい戦争はなんとか終結したし、リベール王国は侵略されることを免れた。そのために助かった命は多いと言われている。
遊撃士たちはリベール王国の民にとって英雄なのだ。
父カシウス・ブライトも、この遊撃士協会に勤める遊撃士だった。
「あたしはぜったい遊撃士になる！」
十年間繰り返した言葉を今日もまた口にする。
それはエステルの誓いだった。
朝食を終え、エステルとヨシュアは遊撃士協会の支部のあるロレント市を目指して家を出た。

†　†　†

研修の最終日は実技試験だった。
市の地下にある水路の奥から指定された物を持ちかえれと命じられ、水路の魔獣に手こずらされつつも、エステルとヨシュアは無事に地上へと戻ってきた。
二人は試験を突破したのだ。
「エステル・ブライト。ヨシュア・ブライト」
試験官を務めてくれた女性遊撃士のよく通る高い声が響く。
研修の仕上げを任されたこの遊撃士の名はシェラザード。父カシウスとも親しくしている遊撃士で、幼いときから「シェラ姉」と呼んでエステルは慕っていた。
彼女はエステルとヨシュアに向かってかしこまった声で宣言する。
「本日１５：００をもって、両名を《準遊撃士》に任命します」
その言葉を聞いて、エステルの胸に十年間の積もり積もった想いが押し寄せてくる。やった……と、心のなかで拳を握って叫んでいた。
ぼそっとヨシュアがエステルだけに聞こえる声でつぶやく。
「エステル、顔がにやけてる」

「あっと……」
両手で顔をはさんでにやけた顔を元に戻した。
「まったくもう……ふふ。ええと、では以後は、遊撃士協会の一員として人々の暮らしと平和を守るため、そして正義を貫くために働くこと！」
そう言いながら、シェラザードが小さな箱をエステルとヨシュアに見せた。
「ん？　その箱って……」
シェラザードがにこっと微笑む。
その小箱は、二人が地下水路から取ってきたものだ。
「よく我慢したわね、エステル。この箱の中身を見ていたら失格だったのよ」
「げっ！」
思わずエステルは声をあげてしまった。
シェラザードが眉をひそめる。
「あなた……まさか」
「みみ、見てない。見てないってば！　ね、ヨシュア、見てないよね！」
「まあ……あぶないところだったけどね」
「まったく……」
ため息をつきながらシェラが小箱の蓋を開けて、二人になかを見せた。

「あ」
「それって……」
箱には憧れていた《準遊撃士の紋章》――翼のついた楯に鋼の手甲が重ねられた紋章――が入っていた。
紋章を二人に渡しながらシェラが微笑む。額にかかった髪の奥にある瞳の色が優しい。
「おめでと。これからはお仲間ってわけね」
「仲間……！」
その言葉にエステルは胸がいっぱいになった。
目の前の遊撃士は今までは憧れる対象だった。今でも尊敬の対象だ。けれど、今日からはそれだけではない。若手遊撃士のなかでも一、二を争う《銀閃のシェラザード》の、自分は「仲間」になったのだ。
「やったねヨシュア！」
「僕が遊撃士か……」
「ヨシュアってば、もっとパーッと喜ばないと！」
エステルの言葉に、シェラザードが苦笑混じりの笑みを浮かべた。
用事があるからと彼女が立ち去ると、エステルは手に入れた準遊撃士の紋章をもう一度ためつすがめつしてしまう。口許が思わずゆるみっぱなしになる。

「エステルってば、だから顔がゆるみすぎだよ」
ヨシュアになんと言われてもエステルは平気だった。
「じゃ、父さんの買い物を済ませてから帰ろうよ！」
早く家に帰ってこの紋章を父に見せたい。
「はいはい」
支部の建物を出た頃には日が傾いて夕方になっていた。
父に頼まれた買い物を道具屋で済ませ、さあ郊外の我が家へと戻ろうとしたところで、エステルたちを呼び止める声があった。
「エステル、ヨシュア！　いいところで見つけたわ！」
声に振り返ると、遊撃士協会支部の受付嬢をしているアイナが通りを走ってくる。
エステルたちの前までくると立ち止まり、膝に手を当てた。息が荒い。
「どうしたんですか？」
ヨシュアが問いかける。
アイナはやけに急いでいて、顔が真剣だった。
「はあはあ。す、少し面倒なことになったの。あなたたち、ルックとパットの二人を知ってるわよね？」
エステルは頷いた。

良く知っている。ロレントの街に住む生意気盛りの子どもたちだ。
「二人とも、北の外れにある古代の遺跡に向かったまま、まだ戻ってこないの！」

† † †

古代の遺跡を探検してくる。
ルックとパットはそう言い残したらしい。
遊撃士協会の受付嬢アイナから話を聞いて、エステルとヨシュアも心配になった。
もう、夕暮れに近い時間だ。
そして古代の遺跡のなかには恐ろしい魔獣が出るという噂もあるのだ。
支部にはあいにく遊撃士たちが誰も詰めておらず、これから探して連絡を取るにしても、間に合うかどうか微妙なところだという。
「あたしたちが行きます！」
エステルはきっぱりと言った。
「急げば、遺跡に入る前に捕まえられるかもしれない」
こういうとき、ヨシュアはエステルを止めない。言っても無駄な事をいちばん良く知っているのがヨシュアなのだ。

「わかったわ。こっちも手の空いている遊撃士を探して、後を追ってもらうから」
「お願いします、アイナさん」
アイナが頷いた。そのままきびすを返して、支部へと戻っていく。
「よし。走ろう、エステル」
「うん！」
街の出口から街道へ。エステルとヨシュアは、子どもたちを追って駆けだす。
黄昏が色を濃くしてゆくなか、二人は走り続けた。
街の郊外にある森へと辿りつく。
そのまま森のなかへ。
走り続けてエステルは胸が苦しくなっていた。息が切れてしまう。
これ以上は無理かも、と思ったところで森が終わって、古い塔がいきなり姿を現した。
古代文明の遺跡だ。
《翡翠(ひすい)の塔》と呼ばれている。
エステルもヨシュアも知ってはいたが、まだ入ったことはない。
「あ、あの子たち……もう、なかに入っちゃったのかな？」
呼吸を整えつつ、エステルは翠色(みどり)に輝く高い塔を見上げる。
くぐもった獣の鳴き声が開いた扉からかすかに聞こえた。

噂どおりになかは魔獣でいっぱいのようだ。
「こんな、アブナイところに……。ったく、あの、二人ったら……！」
「急ぐ必要がありそうだね」
エステルの傍らで立ち止まったヨシュアが言った。こちらは息も切れていない。涼しい顔だ。
エステルはちょっと憎たらしくなった。そんなこと言ってる場合じゃないけど。
「すぐに入ろう」
エステルは頷く。
深く息を吸ってから扉をくぐった。

「吹き抜けになってたんだ……！」
エステルは呆然としてしまう。
塔のなか。入った先には一部屋ほどの大きさの、扇を広げたような半円状の床が宙に浮くようにして広がっていた。
扇状の床には壁もなく天井もなく。足下から十数歩先で、切り取られたように唐突に終わって、奈落へと続く穴が開いていた。
端まで歩いて見上げれば、遥か高みまで遮るものは何もなく……。
足下から正面には短い橋。

その橋は、吹き抜けの中央に存在する、ひとまわり細い塔へと繋がっていた。

視線を上下左右に巡らせ観察して初めてわかる。

四隅にある扇状の踊り場と中央の塔が、互いに短い橋で繋がっているという造りになっている。

塔の内側に、入れ子状に細い塔が地下深くから伸びていて、各階層ごとにある四隅の扇状の踊り場と短い橋で連結されている、と伝えればわかるだろうか。

まるで巨大な井戸のようにも思えてくる造りだ。

「なんでこんな造りになってるんだろう……」

「それも含めて謎だね」

エステルのつぶやきにヨシュアが返した。

この塔は、古代文明の遺跡だという話だ。

壁も床も翠色の石が多用されていた。壁沿いに設置されている導力灯の光を受けて、ぼんやりと輝いている。翡翠の塔と呼ばれる由縁だろう。

「ひんやりしてる……」

カビ臭い空気は湿り気を帯びており、流れていた汗がたちまち止まる。熱を奪っていって肌寒いくらいだ。

エステルとヨシュアは足下から伸びる短い橋を渡る。

中央部の細い塔を抜けて、反対側の踊り場へ。

警戒しながら進んでいった。

そこここにわだかまる闇のどこに魔獣が潜んでいるとも限らない。

壁の所々が剥がれて落ち、床石がいくつか剥げてしまっている。壁から生えるようにして付けられた導力灯も、いくつか消えてしまって点いていない。

古い古い物なのだと実感できた。

誰が、いつ、何のために建てたのかわからない謎の遺跡。今では訪れる者もなく、荒野を彷徨う魔獣――人外の、危険な獣たち――の棲み処となってしまっている。

そんな処にあの二人は入っていってしまった。

床に溜まった埃には、まだ新しい小さな足跡がぽつぽつと見て取れる。ルックとパットのものだ。いたずら好きのやんちゃな男の子たちで、いつも世話ばかり焼かせるが、だからといってここで魔獣の餌にさせるわけにはいかない。

エステルは白木の杖を強く握りしめる。

絶対、追いつかなければ。

エステルには我慢できないのだ。自分より弱いもの小さなものが、理不尽な力に曝されて不幸になることなど。それはエステルの経験してきた辛い過去が彼女の心のなかに育てた想いなのかもしれなかった。

だからこそ――遊撃士になった。
（ルック……パット……無事でいて！）
反対側の踊り場まで辿りつくと、上へと昇る階段が見えた。
足跡はまだ続いている。
二階に上がったようだねと、ヨシュアが推測を口にしたときだ。
「た、助けてぇぇっっ！」
悲鳴が聞こえた。
はっとなる。
ヨシュアと顔を見合わせた。
今のは――ルックの声だ！
「いけないっ！」
叫んだときにはエステルはもう走り出していた。階段をひとつ飛ばしで駆け上がる。
「エステル！」
背後からヨシュアの咎める声が聞こえたが脚は止まらない。
途中で折り返す階段を昇りきって上の階へ。
上階に辿りついたところで、目の前に広がった扇状の床に子どもの背中が二つ見えた。
ルックとパットだ。

魔獣に取り囲まれていた。その数、五。
今にも襲いかかろうとしている。
「うりゃあああっ！！」
魔獣たちの気を引こうと殊更に大きな叫び声をあげながらエステルは突っ込む。
一匹に、あっという間に近づく。
振りかぶった白木の杖を力任せに振り下ろした。
断末魔の悲鳴をあげて、魔獣が倒れる。
（まず、一匹！）
「次はどいつ！　相手になってやるわよ！」
魔獣に向かって言い放った。
「エ、エステルねーちゃん!?」
「あんたたち！　危ないから下がってなさい！」
二人を背にかばうようにして立ち、杖を構え直す。
次の相手を選ぼうと視線を巡らせた。
右手のヤツが自分の死角から噛みついてこようとしているのが目に入る。
とっさに身体をひねって避けようと――
（しまった！　間に合わな――）

「せいッ！」
間一髪で飛び込んできた影にそいつは弾きとばされた。
助けてくれたのが誰なのか、見なくてもわかった。

† † †

「ヨシュア兄ちゃんだぁ！」
「エステルってば。なに、ひとりで突っ込んでるのさ！」
「お説教はあとあと！」
「ったく、この鉄砲娘め……」
何か言われたがエステルには気にしてる余裕はない。同い年なんだから「娘」呼ばわりは心外だとも思ったりもするけれど、そこに突っ込むのも後回し。改めて残った魔獣たちを睨みつける。
魔獣の正体は《飛び猫》だった。
名前には「猫」と付くものの、愛らしいペットとは、身体の大きさも気の荒さも桁が違う。獲物を捕らえるための長く硬い爪を生やし、引き裂くための大きな牙を持っている。もちろん肉食。おまけに背中からは翼まで生やしていた。まさに魔獣と呼ぶにふさわしい。今もその翼を打ち振って宙に浮いている。
対するエステルの武器は身長ほどの長さの白木の杖だ。ヨシュアのほうはダークと呼ばれる片刃の短剣を左右、両手に持っている。
二人とも、距離をとって戦う武器ではなく、相手に近寄らなければ話にならない。
空を飛べる翼のある相手とは少々分が悪い。
とはいえ狭い塔のなかだ。相手も自由自在に飛び回れるわけではないはずだ。
二匹倒したから、残りは三。
ギャニャァァァァ！
ひと声啼いて、左手の飛び猫がエステルに襲いかかってくる。
（くうっ！）
身体をひねりながら、手にした杖を身に引きつけ、急所の首筋を狙ってきた魔獣の牙を棒のなかほどで受けた。
ガツッ！
と、手に衝撃を感じる。身体ごとぶつけられたが、辛うじて牙も爪も当たっていない。
魔獣の真っ赤な口が、エステルの顔から、ほんの小指二本ほど先にあった。ぞっとして肌が粟立ってしまう。牙から滴る涎がはっきり見えた。開いた口内から伸びる赤い舌も。その奥の喉がごくりと蠢くのも。

互いの視線がぶつかる。
魔獣が嗤った気がした。
思い切って力任せに杖を振り、飛び猫を払い落とす。床に叩きつけられる前に翼を振って、そいつは宙へと戻った。
「今度は――こっちの番なんだからあ！」
一気に踏み込み、杖を振りかぶる。
そいつは翼を羽ばたかせて間合いの外へと浮き上がった。
（甘い！）
エステルは振り上げた勢いを使って、なかほどで掴んでいた白木の杖を手のなかですっと滑らせる。
杖の端を掴めば、二の腕ぶんほど届く距離が伸びた。棍という武器は間合いが変化するのが特徴なのだ。振りかぶった勢いを乗せて、杖の先端を、外へと逃げた飛び猫の腹へと叩き込む。
（手応え、あり！）
壁までふっとばされて、激突して落ちた。
動かなくなる。
その間に、ヨシュアがダークでもう一匹を倒している。
残るは一匹。

（いける！）
残った一匹と自分との彼我の距離は、六歩――三アージュ、というところ。エステルは間合いを詰めた。
床を、蹴る！
体重を乗せて振った杖を、飛び猫の腹へと叩き込んだ！
魔獣が床に叩きつけられた音だけがあがる。
悲鳴さえあげれずに、飛び猫は倒されたのだった。
「すっげえええっ！」
ルックのあげた歓声がエステルの背中から聞こえてくる。
くるりと振り返って、ルックを捕まえた。
「このおバカ！」
両の拳でルックの頭を挟み込む。そのままゲンコツをぐりぐりと押しつける。
「イテテテテッ！　イテッ！」
「あんた、パットまで引っ張りこんで、何やってんのよっ。ココがどんなに危険なところか知ってるの!?」
「イ、イタイよっ、エステルねーちゃぁあああん！」
「反省・し・な・さ・い！」

今度は、頭を腕のなかに抱え込み、そのまま締めあげた。ぎりぎりぎり。

「ぎゃぁああ！」

「この、この、この悪ガキったら！」

もちろん手加減はしていた。本気でやったらホントに泣いてしまう。まったく、心配させて。

「エステルお姉ちゃん。あの……そのへんにしてあげて……」

「大丈夫よ、パット。コイツはこのくらいしないと――」

「エステル！」

切羽詰まった声に、はっとなる。エステルは、反射的に抱えていたルックを突き飛ばし、自分から遠ざけた。

杖を掴みなおし、身体を振り向かせようとする。視野の端に、暗がりから飛び出てきたソイツが目に入った。真っ白い貝殻を幾つも重ね合わせたような大きな――。

《コーラルシェル》！

珊瑚の魔獣だ。エステル目掛けてぶつかってきた。

一瞬のことのはずなのに、エステルは妙にゆっくりと感じていた。

コーラルシェルは海からあがってきた魔獣だ。無数の小さな虫――珊瑚虫が寄り集まってできている。群体、というのだと物知りなヨシュアが前に教えてくれた。まるで大きなひとつの生き物であるかのようにふるまう。元は海の生き物のくせに地上を走り、獲物を捕らえて喰う

のだった。

回避は間に合わなかった。

ひと抱えもある珊瑚虫の塊にぶつかられて倒された。エステルは尻もちをついてしまう。

身体の上にのしかかられた。

（重っ！）

手から杖が零れ落ちる。硬い床でからんと跳ねて転がった。

（しまった！）

エステルは、のしかかってくるコーラルシェルを押し返そうとした。だが大きな犬ほどもあるその身体は重くて、とてもではないが動かせない。

鎧の上でざわざわと魔獣は蠢いていた。こいつは確か――獲物の身体にぴったりと吸い付いて万を超える虫たちの小さな口で皮膚を食い破り体液をすするのだと言っていた。

全身の毛が逆立ってしまう。喉がからからに乾いた。

（生きながら喰われるなんて！）

けれど、エステルは腕ひとつ動かせない。

「エステル！」

駆け寄ってくるヨシュアの足音と声が遠い。

間に合いそうもない。

革の鎧の上からジリジリとそいつはエステルの肌の上に辿りつこうと蠢き……。
真っ白い光がエステルの視界を焼く。
重みがとれて、急に身体が軽くなった。
「……あれ？」
コーラルシェルが殻を砕かれて壁際に転がっていた。
《魔法（アーツ）》の光……？
誰かが放ったアーツ——導力魔法がコーラルシェルの硬い殻を砕き、弾き飛ばした。
エステルを助けてくれたのだ。
けど——誰が？
「よかった、来てくれたんだ」
ヨシュアのほっとした声が耳に入る。ということはヨシュアではない。
身体を捻って、階段のほうを見る。
男がいた。
「行動力ととっさの判断までは良かったが詰めが甘いな。用心が足りないぞ、エステル」
「と、父さん！」
助けてくれたのは、エステルとヨシュアの父だったのだ。
どうしてここに、と問う前に、ルックとパットが駆け寄っていた。

「か、かっこいい！　カシウスおじさん！　エステルの何倍もかっこいいよ！」
「すごいです！」
先ほどまでの怖がっていた表情はすっかり消えて、二人の男の子はきらきらした瞳でエステルの父を見上げていた。
エステルの父——カシウスが笑みを浮かべながら二人の頭を撫でた。
「見えざる脅威に備えるため、常に感覚を研ぎ澄ませておく。それが遊撃士の心得だ」
常に、だ。と繰り返す。
その言葉がエステルの耳にも届く。聞こえるように言ったに違いなかった。
「あう……」
反論したくてもできない。その通りだから。
「助かったよ、父さん」
ヨシュアが言った。
「まあ、守ることに関しては、おまえもまだまだということだな」
「……うん」
「さあ、町に帰るぞ、坊主ども」
「はい！」
「は、はい！」

ルックもパットも素直に頷く。カシウスとともに階段を下ってゆく。
立ち上がったエステルは、ついつい頬を膨らませてしまった。
「助けてくれたのは感謝するけど……なんか、いいところを全部持ってかれちゃった」
「はは。仕方ないよ。なんといっても、カシウス・ブライトだからね」
父の名前を特別な調子で呼んだことに、そのときのエステルは気づかなかった。
代わりにエステルは叫んだのだった。

「納得いかなーい！」

ヨシュアが隣で困った顔をしていた。
それが、エステル・ブライトとヨシュア・ブライトが準遊撃士になってから初めて解決した事件になった。

第二幕　翡翠の塔

エステルはヨシュアと共に扉を開いた。
部屋のなかに、二人の人物が向かい合わせになって座っていた。
ひとりは依頼人の市長だ。人の良いおじさん、という印象の男性で、口の周りの整えた髭がよく似合っている。
もうひとりは知らない顔の、エステルと変わらない年頃の少女だった。
「あの時計台にはそんな逸話が……。わたくし、とても感動しましたわ」
市長に向かって言って、少女は胸の前で手を合わせ瞳をうるませる。
良いところのお嬢さんっぽいな、というのがエステルの彼女に対する第一印象で、それは少女の着ている制服からも推し量れた。
白のスカートと紺のハイソックス。
ジェニス王立学園の制服だったのだ。
王立学園は、ロレントから見ればお隣にあたるルーアン地方にある全寮制の名門の高等教育学校である。

「………おや？」
市長の顔が扉を開けたエステルとヨシュアに向く。
「おお、エステル君たちか」
「あの……例の品を届けに来たんだけど……後にしたほうがいいかな？」
「いやいや。それには及ばない。ああ、君たちにも紹介しよう。こちらはジョゼット君じゃ」
エステルの推測どおり、ジェニス王立学園の生徒だという。
「お初にお目にかかります。ジョゼット・ハールと申します」
椅子から立ち上がり、ジョゼットは丁寧にお辞儀をしてくる。
「あたしはエステル。よろしくね、ジョゼットさん」
「ヨシュアです」
エステルに続いてヨシュアもよろしくと繰り返した。
市長がエステルたちを遊撃士だと紹介すると、ジョゼットは目を輝かせ、会えて嬉しいと言った。
どうやらジョゼットのなかでは遊撃士は憧れの対象らしい。
面映ゆいものを感じてしまう。
だってまだ大した仕事はしていない。
照れ隠しにエステルは話題を変える。

「ジョゼットさんはどうしてここに？」
「わたくし、自主研究の一環として、各地の重要文化財を調べているんです」
彼女は学校の歴史の授業とは別に、王国各地の歴史について学んでいるらしい。
エステルは感心してしまった。
自分だったら、学校の勉強だけで精一杯だろう。手足を動かすほうがエステルは得意なのだ。剣術や棒術の特別授業ならばいくらあっても苦にならないのだが。
「それで、エステル君。例の品はどれかね？」
「あ、うん。これなんだけど」
ふところから、エステルはその品を取り出した。
緑色にきらめく大きな石だ。
手のひらに乗せて見せる。
「すっごく大きいでしょ？」
「まあ、これは七耀石ですわね」
「うむ。見事じゃのう」
ジョゼットの目も市長の目も釘付けになっている。
その七耀石は、市長からの依頼で、鉱山から直接に持ってきたものだった。
七種ある七耀石のひとつ——大粒の翠耀石（エスメラス）の結晶体。

市長は、それを女王陛下への贈り物とする予定だという。押し戴くようにしてエステルから結晶を受け取ると、市長はそれを部屋の隅にある金庫にしまい込んだ。
ダイヤルを回して厳重にロックを掛ける。
緑色に輝いていた結晶が金庫のなかに消えると、エステルは、なんだか大事にしていた宝物を手放してしまったような気分になった。ほう、とため息が聞こえる。ジョゼットがまだ夢見るような瞳をしたまま、閉じた金庫の扉を見つめていた。
彼女もなんだか残念そうだ。
「これでよし、と」
市長が振り返り、エステルとヨシュアに感謝とねぎらいの言葉をかけてくる。
無事、依頼達成。
支部に報告すれば、エステルたちはまたひとつ準遊撃士から正遊撃士へと近づくことになる。
「それにしても、わたくしといくつも変わらないように見えますのに、遊撃士として市長から依頼を受けるなんて、すごいですわ」
ジョゼットが感心した声で言った。
エステルはつい頭を掻いてしまう。
「あ、いや。それは違うのよね。依頼はあたしのお父さんが受けたやつで、あたしたちは父さんの代理なんだ」
「まあ」
「どうしても外せない用事が出来たとかで、父さんはいまロレントにいないの。それで、あたしたちが代わりに依頼をこなしてるってわけ」
事実だから取り繕ってもしょうがない。
「いやいや。エステル君たちは立派に役目を果たしてくれたよ。代役なんてとんでもない。次に何か依頼するときには最初から君たちにお願いしたいくらいじゃ」
「えっ、ほんと？　やった！」
「エステル。はしゃがない」
ヨシュアに釘を刺されて、エステルは、あははと頬を掻いた。それを見て、ジョゼットが微笑む。
ちょうど話も終わっていたということで、ジョゼットとともにエステルたちは市長の部屋を出た。
ついでだからと、ジョゼットが泊っているというホテルまで送ることになった。彼女は、学校の休みを利用してロレントまで来ているらしい。もう明日には定期船でルーアンまで帰ってしまうということだ。
ジョゼットとはホテルの前で別れた。
「やー、いい子だったわね～。良い所のお嬢さんっぽいのに、それを鼻にかけたところがないし」

「うん……」
「あれれ？　どうしたの、ヨシュア」
「エステルはさっきの気にならなかった？」
「んん？　なにが？」
「いや……気にならなかったのなら、いいんだけど」
「なになに？　何が気になるの？　お姉さんに言ってごらん。なにか気になる……って、なに、ヨシュアってばひょっとしてああいう子がタイプなの？」
「えっ？　なに変なこと言ってるのさ」
　ヨシュアが驚いた顔になる。
「隠さなくてもいいのに。ヨシュア君ってばお嬢様タイプが好みだったなんてねぇ。お姉さん、びっくりしちゃったな」
「……あのさ。そういうことじゃなくて……」
「まあ、いい子だったもんねー。清楚で上品で。さすが名門学校の生徒！」
「……にしては食い入るように見つめ過ぎだったと思うけどね……」
　小声で言ったヨシュアの言葉は、エステルの耳には届かなかった。
「えっ？」
「なんでもない。それより、ギルドに報告に行こう。父さんの代理の仕事も次で終わりだよ」

「あ、そうか。よし、気合を入れて行こうね！」
　ギルドに報告を済ませると、エステルは、最後の依頼についてさっそく尋ねようとしたけれど、すでに外は薄暗くなっていて、無理は駄目だと諭された。
「だいじょうぶよ。なるべく早くとは言われているけれど、緊急ってわけじゃないらしいからね」
　エステルは最後まで渋った。なるべく早く、父から頼まれた代理の仕事を終わらせてしまいたかったのだ。カシウス・ブライトなら、もっと早く終わらせていた、などと言われたくない。
　でも確かに、七耀石を運ぶために鉱山まで往復した疲労は身体に残っていて、ふと気を抜くとまぶたが重く感じられるのだった。休むのも仕事のうちだと説得される。
「じゃあ、明日また来ます」
　ヨシュアが言った。
　依頼人たちは、《ホテル＝ロレント》に泊って待っているとだけ聞かされた。
　ホテルの名を聞いて、一瞬だけ、さっきジョゼットと別れたところだ、と思考がかすめた。
だが、それも束の間のこと。
　エステルはすぐに次の依頼に気持ちを切り替えてしまい……。
　おかげで、市長邸で起こった出来事は、すっかり頭の隅に置いてきてしまった。

†　†　†

明くる日。
昼少し前にはエステルとヨシュアは、《ホテル＝ロレント》へと辿りついていた。
顔なじみである受付のヴィーノへと声をかける。
「おや、エステルさん、ヨシュアさん。お久しぶり」
「ヴィーノさん、ちょっと聞きたいんだけど。リベール通信社の記者さんが、ここに泊まってるってホント？」
「よくご存じで。何かご用件でも？」
実は、とヨシュアが切り出す。
最後の依頼は、記者の取材に協力してやってくれ、というものだった。
雑誌《リベール通信》といえば、エステルの父も愛読しているリベール王国きっての大雑誌である。真面目な記事からゴシップまで内容も幅広い。
その雑誌社の取材に協力しろというのだ。
どうやら危険な場所に赴く予定があるらしい。
「ほう、カシウスさんの代わりに。それはそれは。ああでも、実はですね……。記者のお二人とも、今はホテルから外に出ておりまして、不在なのです」
「あらら」
「そうなんですか。あの、どちらに行かれたかは？」

ヨシュアの問いに、受付の青年は、二人のうちのひとりは、ホテルからさほど遠くない酒場に行ったと答えた。
「まだ昼なのに？」
エステルは目を丸くしてしまう。
「《アーベント》は昼は定食を出しているはずだよ」
「あ、そうか」
街の酒場の多くは、お酒ばかりを飲ませているわけではなくて、昼はふつうに食事処として商っているのだ。
エステルたちはアーベントを覗いてみることにした。
ぼうっとホテルで待っているよりはいい。
大通りを越えた先にある酒場は、ちょうど昼時ということもあって賑わっていた。
扉を開けると、客たちのざわめきがエステルたちを包む。揚げたばかりの山盛りのポテトを大皿に載せたウェイトレスが前をよぎった。焦げた油の良い匂いが鼻をつく。
「お腹が鳴っちゃうかも」
「エステルってば意地汚いよ」
「む。そんなことないもん」
「どうだか」

肩をすくめるヨシュアから視線を逸らしながら、エステルは店内を見回す。
カウンターに見慣れない男が座っているのが目に入る。
どうしてその男に目がいったかと問われれば、服装と雰囲気と答えただろう。ロレントは小さな街で、どちらかといえば田舎にあたる。
その男の服は、都会でしか売っていないような流行りのスーツを着ていたのだ。王都か、ボース市にあるという巨大なマーケットで買えるような。
リベール通信社は、王都にある出版社だ。ひょっとしてと思ったわけだ。
ただ、その男に近づいていくにつれて、エステルは徐々に不安になっていった。
（こ、このひとでいいのかな？）
確かに仕立てのいい服だった。
だが、近づいてよく見れば、物こそ良いものの、着こなしはサイアクに近い。
服は着ジワでよれよれだし、前のボタンはぜんぶ外しているし、ネクタイはゆるゆるで辛うじてひっかけただけという有様だ。
おまけに顔には無精ひげを生やしている。
目つきも悪かった。
（こ、これは……ちょっと。違うかなー）
人を見た目で判断してはいけないとは思うものの。

「あん、何だお前さんたちは？」
ぎろりと睨んでくる。
ちょっと怖い。
「えっと、まさかと思うんだけど。あの……あなた……」
「んだよ？」
おまけに柄まで悪いとは。
「ひょっとして、リベール通信の記者さん？」
「その通りだが……」
「えっ、ほんとに！」
あまりに意外だったので二の句が継げなくなったエステルを、男はまたも睨んでくる。
「何か用か？」
返事を言いよどむエステルをヨシュアがフォローしてくれた。
「遊撃士協会から来ました。護衛の依頼をされたそうですね？」
ヨシュアの言葉に、男は一転して表情をゆるませた。
「ようやく来たか！　で、噂の遊撃士、カシウス・ブライトはどこだよ？　ついでにインタビューのひとつでも取れりゃ、一石二鳥——」
「あー、それなんだけど……。本人、別の仕事が入っちゃったの。それでロレントを離れちゃ

って……」
「んだとぉ？　そんな話は聞いてねえぞ」
「ごめんなさい。でも、あたしたちがしっかりと代わりを務めるから」
　エステルがそう答えると、記者の男はぽかんと口を開いた。
「はあ？　お前らがぁ？」
「そう」
「こんなガキどもが遊撃士？　俺たちの仕事を手伝うってのか？」
「ガ、ガキって何よ。失礼ね」
「スカートも履いてねえ、色気のねえガキじゃねえか」
　上から下までエステルを無遠慮に眺めまわしてから言った。
「これは棒術家のちゃんとした胴着なの！　失礼なオジサンね……」
「オジ……。ちょっと待ちやがれ！　聞き捨てならねえ。お、俺はまだ二十代だ！」
「いくつ？」
「二十九！」
「誤差の範囲じゃない。ね、ヨシュア。そう思うよね」
「僕に同意を求めてどうする気さ。……とにかく記者さん。僕たちはギルドからちゃんと派遣されてきたんです。他の仲間に頼むこともできますが、その場合は、いつになるか判りません

よ？」
　ヨシュアに冷静に指摘されて記者の男はううむと唸って考えこんだ。
「仕方ねえ。これ以上は締切を伸ばせねえし」
　悔しそうにそう言った。
　締切とはよほど怖いものに違いない。
「ではそういうことで。……僕はヨシュアといいます。彼女はエステル」
「リベール通信のナイアル・バーンズだ」
「で、どこに案内すればいいの？　たしか危険な場所に取材に行きたいって話だったと思うけど」
　エステルの問いに、ナイアルが答える。
「ああ。知ってるかどうかわからねえが。《翡翠の塔》って名前の古い遺跡だ」
「《翡翠の塔》？」
「ああ。知ってるのか？」
「それなら、ついこの前、入ったばかりよ」
「おっ。そいつは都合がいい。俺と、もうひとり、相棒のカメラマンがいるんだけどよ。俺たちをその塔のてっぺんまで連れていって欲しいんだ」
「塔の頂上まで、ですか？」

ヨシュアが確認する。

「雑誌に載せる写真を撮りたいんでね」

「ふーん。物好きねえ」

「わかりました。案内と護衛を務めさせていただきます。それで、その相棒のカメラマンの方は……？」

「オーバルカメラの調子が悪いんでね。工房で見てもらってるはずなんだが……」

急ぎなら迎えに行ったほうがいいのでは、とヨシュアが提案し、工房に行ってカメラマンと合流してから、エステルたちはロレントの街を出た。

すでに昼をまわっていたが、まだ充分に塔まで往復できる時間で、エステルたちは急ぎ足で《翡翠の塔》を目指したのだった。



月刊 FALCOM MAGAZINE Vol.101

発行人	田中一寿
発行協力	日本ファルコム株式会社
編集	小渕智幸 河野崇
デザイン・DTP	株式会社 ACQUA
表紙ロゴデザイン	荻窪裕司（デザインクロッパー）
発行	株式会社フィールドワイ 〒 101-0062 東京都千代田区神田駿河台3-1-9　日光ビル3F TEL 03-5282-2211（代表） http://www.field-y.co.jp/